

時間学公開学術シンポジウム 2019 を開催

2019年6月8日、山口大学学生会館にて時間学公開学術シンポジウム「因果と時間：哲学的時間論の最前線」を開催しました。時間は哲学の古くからのテーマであり、二千年以上前の古代ギリシャ以降、様々な知見が蓄積されていますが、本シンポジウムでは、そうした蓄積を一望すべく、多角的な観点から哲学的時間論の最新状況を描き出すことを試みました。そうして選ばれたのが、時間とは切っても切り離せない「因果」という切り口です。哲学の歴史上、因果と時間という観点で好対照をなす哲学者は、古代ギリシャの哲学者アリストテレスと、18世紀イギリスの哲学者デイヴィッド・ヒュームです。両者は生きた時代もさることながら、因果と時間に関しても、まったく異なる見解を持っていたことで知られています。また、特に現代科学における因果と時間を考えると、統計学における因果と時間も無視することはできません。そこで今回は、統計学の哲学の専門家、ヒューム哲学の専門家、そしてアリストテレス哲学の専門家をお招きし、現代の統計学から18世紀のヒューム、古代のアリストテレスと、時間を遡るかたちで講演していただきました。

最初に講演した大塚淳先生（京都大学・准教授）の講演は、統計的因果推論を中心としたものでした。原因と結果の間には非対称性がありますが、時間にも「向き」という非対称性があります。一方、統計学の中心をなす相関関係や確率的従属関係は非対称性ではありません。大塚先生の講演では、非対称性を統計的因果推論の枠内で導く最近の試みが紹介され、その背景には「哲学的」と呼ぶべき要素が不可欠であるということが論じられました。

次に講演した萬屋博喜先生（広島工業大学・助教）の講演でも時間の「向き」が登場しました。萬屋先生の講演では、「因果のヒューム主義」と呼ばれる、原因と結果の間の必然的結びつきを否定するヒュームに由来する因果の考え方が紹介され、それと現代科学との関係、特に時間に非対称的な「向き」があるという考え（時間の矢）との緊張関係が示されました。

最後の講演者である酒井健太郎先生（環太平洋大学・講師）の講演では、近代以前のヨーロッパの科学観に大きな影響を与えた『自然学』、および科学的探究の方法が論じられている『分析論後書』というアリストテレスの二冊の著作が取り上げられました。そこでは、時間が運動に依存する、とか、現在から時間を遡って過去の原因を推論することは許されるが過去から現在、未来へという向きの推論は許されない、といった、現代人の常識とは大きく異なる因果と時間の結びつきが見られることが紹介されました。

シンポジウムの最後に行われたパネルディスカッションでは会場との活発な質疑応答も行われ盛会のうちに閉じました。



大塚淳 先生



萬屋博喜 先生



酒井健太郎 先生



ISST 国際時間学会 Los Angeles 大会に参加

2019年6月23日～29日にカリフォルニア州ロサンジェルス(Loyola Marymount University)で開催されたISST 国際時間学会 Los Angeles 大会に藤澤健太時間学研究所長と平田博子事務補佐員が参加しました。国際時間学会とは2016年から連携を図っており、この度、学会長のSteineck Raji先生(チューリッヒ大学・教授/時間学研究所・客員教授)から本大会へ参加の提案をいただき実現しました。この大会へは日本時間学会のメンバーも参加した他、各国から約80名の研究者が参集しました。

大会では藤澤所長自らの研究発表および時間学研究所の紹介を行いました。”A Study on Time Transfer for Interplanetary Space, and an Introduction of the Research Institute for Time Studies”と題して行った藤澤所長の研究発表では、VLBIという電波天文学の観測技法を深宇宙探査機の通信に応用することで、ピコ秒レベルの精密時間伝送が可能であることを基礎実験の結果とともに発表すると、これは太陽系重力場を用いた一般相対性理論の実験的検証にも役立つという点がこの分野に関心を持つ参加者の興味を引きました。その後、時間学研究所の歴史および研究所で行われている時間生物学、心理学、社会学、哲学の研究をそれぞれ紹介しました。時間学という名前がついた研究所は世界にも他に例がなく、また今回の国際時間学会の研究発表は哲学および芸術論が中心であったため、それらとは異なる分野の研究に関心が寄せられました。このことで、日本で進められている時間学の研究は世界的にも独自かつ意義のある内容であること、国際協力によって研究が発展する可能性があることを意味していることの実感を得ました。

一週間に渡り開催された大会では、様々な分野の発表が行われたほかビジネスミーティングやレクリエーションなどの時間も設けられ情報交換をするなど交流を深めることができ、今後の更なる連携のための大きな礎を築くことが出来ました。



集合写真



文化史における〈速度〉の意義

鉄道旅行という新しい旅の形式をはじめて実践したのは19世紀のヨーロッパ人たちだった。かれら最初期の鉄道旅行者たちが何よりもまどい不満を感じたのは、車窓を猛烈な速度で過ぎ去る景色であったとシヴェルブシュ『鉄道旅行の歴史』は書いている。同書によると、当時一般的だった馬車や徒歩での旅行では、ゆったりとした速度のもと、途上で目にした個々の事物や光景に逐一注意を向けるのが通常スタイルとなっていた。旅人たちは、旅程中に視界に映る諸々の景観から固有の意義を感受することを、目的地に到着することと同じほど重視し楽しんでいた。しかしながら鉄道旅行では、窓枠から視界にはいつてくる光景は、個々の事物の意味や形状を読みとることができないほど目まぐるしい速度で流れ、消えてしまう。そのため、伝統的な旅のスタイルを自明とした当時の人びとにとって、鉄道旅行時の外界の眺めは耐えがたいものと映っていた。

鉄道の〈速さ〉に対する同時代人たちのこの困惑や不快感とは、ただし、物理的な速度に対するそれとかがえるべきではないと同書はいう。鉄道旅行者の目前を次々に過ぎ去る風景群とは、まずもって「切符という形で買われた商品」であるからだ。つまり最初期の鉄道旅行者たちの不満やまどいを深層にあって基礎づけていたのは、(機械技術と不可分に結びついた)産業革命後の商品流通の劇的な加速なのだと同書は解説する。実際、新奇な商品を刹那的に欲望・忘却するあたらしい消費様式が大都市で劇的に拡大する19世紀半ばになると、鉄道旅行者たちは車窓を次々に流れる景観=商品の群れを魅力的なものとして知覚しはじめる。いいかえると、機械技術と結びついた〈速度〉に対する人びとの態度や心性とは、文化史家にとって(機械そのものというより)近代的な生産流通機構への馴れの度合をおしえるという点で重要な指標となるのである。

時間学公開講座 in 福岡『時間学への招待』を開催

3年前から毎年開催している時間学公開講座 in 福岡『時間学への招待』をアクロス福岡で開催しました。例年は事前申し込みで参加者を募っていましたがいつも定員を超える申し込みがありお断りする状況でした。そのため今年は広い会場に変更し申込不要のスタイルにしました。また、過去2回は天文学・社会学・心理学でしたが今年度は分野を変更し天文学・哲学・生物学の時間学研究所若手研究者による講座を開催しました。3回とも多くの方に足を運んでいただき盛会となりました。

10月11日（金）18:00～19:30

青木貴弘 助教（特命）

【時間領域天文学】



時間領域天文学というタイトルで、星の爆発のような時間変動する天体现象など、天文学と時間について話しました。時間の概念に関する偉人たちの考察を例に挙げ、アリストテレスとアウグスティヌスの時間論から、ニュートンとアインシュタインの時間論について紹介し、現代社会における時間の定義に触れました。その時間を定義する取り組みの中でパルサーという天体が登場しますが、そのパルサーの紹介を皮切りに、話題を天文学に移し、時間変動する天体现象について紹介しました。例えば、近年のノーベル賞に重力波の発見というものがありましたが、その重力波の源となった天体现象がどんなものだったのかを動画で紹介し、宇宙ではどんなことが起きているかイメージをつかんでもらう機会を提供できたのではないかと思います。動画を多用したことで概ね好評価だったものの、言葉足らずで伝わらないことも多く「難しい」というご意見もいただき、話の構成と説明を改善しなければならぬと認識できました。

10月18日（金）18:00～19:30

小山虎 講師

【「今」という時間】



10月18日の公開講座 in 福岡では、「今という時間」というタイトルで、「今」が今だとどうしてわかるのか、という問題を題材に、分析形而上学の時間論を紹介した。この問題は、時間が流れ、過去は確定していると考える限り、「今」という言葉が指す時点が、時間の流れと共に移りゆく過去と未来の境界点だとしても、発言があったその時点だとしても、過去と未来の境界点である「今」がいつなのかを知ることは不可能になるという問題である。加えて、この問題を解消する三つの方策がそれぞれ、意識、時空、過去の実在という哲学的問題と関係していることを紹介した。

哲学の時間論というほとんどの聴衆にとっては聴き慣れない内容であったはずだが、質疑応答の時間や、終了後の質問からすると、内容が難解でついていけなかったということは無さそうであり、時間についてじっくり考えることで時間の不思議さがさらに感じられる、という哲学ならではの体験を与えることには概ね成功したのではないかとされる。

10月25日（金）18:00～19:30

松村律子 助教（特命）

【細胞の時間】



第3回目は、「細胞の時間」と題して、生物が持つ概日時計という機能について概説し、その分子メカニズムの話をしました。また、細胞レベルでの概日時計研究がどのように行われているのかについて、実例を挙げながら解説しました。概日時計によって私たちの体の生理機能や行動に1日周期のリズムが生まれますが、リズムの源は、細胞一つ一つの中で時計遺伝子の活性が上がったり下がったりすることなのです。これらを説明するために専門的な内容を避けられず、やや難解になってしまったかもしれませんが、実際の研究手法など一般にはなかなか知ることができない内容をお伝え出来たのではないかと思います。講座終了後には何人の方が列を作って質問に来られました。観客の方の関心の高さを実感するとともに、より良い講座の提供を目指すモチベーションとなりました。

10月1日着任教員紹介

時間学研究所は2020年4月1日に、設立20周年を迎えます。その記念事業として『時間学研究所二十年史（仮称）』を発行することにしました。そこで、第3代所長の辻正二先生を編集責任者として時間学研究所の教授（特命）にお迎えしました。

辻 正二 TSUJI Shoji 教授（特命）

PROFILE

1948年山口市生まれ

九州大学大学院文学研究科博士課程単位取得中退（昭和53年）、その後、鹿児島女子短大講師を皮切りに、鹿児島女子大学講師、宮崎大学教育学部講師、助教授。平成3年4月に山口大学教養部助教授、翌年4月に教授となる。4年後教養部改組経済学部経済学科に分属する。3年後の平成11年に人文学部に移籍し、社会学、社会心理学を担当。その間、開所後の時間学研究所に係わるようになり、平成18年に所長に就任（兼任）。平成24年に山口大学を退職。その後、福岡県にある保健医療経営大学に再就職、平成26年に学部長になり平成30年3月に同大を退職。現在、同大の特任教授。山口大学退職後、2019年3月まで研究所の客員教授を兼任し、10月から時間学研究所の教授（特命）として勤務している。

RESEARCH

専門は社会学と時間学。社会学では社会学理論と社会病理学領域の二領域。社会学理論ではアメリカ社会学の理論家たち（R.K.マートン、W.E.B.デュボア、H.S.ベッカーたちの理論を研究し、他方で実証研究として我が国の高齢者問題を研究してきました。その二つの領域は、2000年の『アンビバランスの社会学』、『高齢者ラベリングの社会学』という著書として出版しました。いま現在関心を持って研究しているテーマは、科研の「大規模災害における時間喪失とその回復過程に関する時間学的研究」（基盤研究C）と人生百年時代を迎える時代に対応した元気高齢者づくりの社会システムの構築というテーマの研究です。そして、今後は、時間学の研究をまとめる作業をするつもりでいます。



Tan Daniela 先生来所

2019年10月15日、チューリッヒ大学のTan Daniela先生（国際時間学会・事務局長）が来所されました。Tan先生は、藤澤所長および森野正弘教授（人文学部）、右田裕規准教授（時間学研究所）、小山恵美先生（京都工芸繊維大学・教授）らと昨年山口大学で開催したTIME J プロジェクトシンポジウムの論文集発行についての打ち合わせを行いました。その後、2022年の国際時間学会大会の候補地である山口大学および山口県内を視察されました。

同大会は2019年11月に国際時間学会理事会において日本での開催が決定しました。これに伴い、時間学研究所と国際時間学会、日本時間学会との更なる連携強化が期待されます。



藤澤所長・右田准教授・森野教授・Tan先生・小山先生